

戦前期日本におけるミッキーマウス受容の一側面 —村岡花子と天野雉彦・「家庭」を形成した思想—

大友 菜摘

【要 旨】

1928年のアニメーション映画「蒸気船ウィリー」以後、ミッキーマウスは日本でもかなり早い時期から受容されていた。戦前期の受容は、現在に至るまで受容を考えるうえでも重要と言えるだろう。だが、戦前期の受容について論じた先行研究は少ない。実際のところ、ミッキーマウスは戦前期の日本でどのように受容されていたのか。

本論文では、新聞記事・広告の分析によってまずは受容の実態を調査し、1934年以降にはミッキーマウスの名を冠した催しが頻繁に開催されていたことを発見した。また、そうした催しの実際を可能な限り調査・分析したところ、初期ミッキーマウスの受容に著名な児童文学者2人（村岡花子と天野雉彦）が大きく関与していたことが明らかとなった。さらに、両者がミッキーマウスを受容した所以を考察した結果、彼（女）らは、国家主義思想にも通じる「良妻賢母」思想や「桃太郎主義」思想に基づき、ミッキーマウスを活用していたと結論づけた。

【講 評】

本論文は、ミッキーマウスというキャラクターの受容過程を分析することで、軍靴の響きが間近に迫る戦前日本の社会のありようを描き出した意欲的な文学研究である。筆者は史資料を駆使してミッキーマウスの受容に関わった児童文学者・村岡花子の「母の愛」思想と天野雉彦の桃太郎主義を中心に検討を行う。そして、ミッキーマウスの受容は性別役割分業にもとづく近代化した「家庭」の構築を目指したものであり、国家主義の思想に連なることを指摘する。家父長制や国家主義などの社会科学的概念については今少し整理と検討の余地があるとも思われるが、研究の着眼点、論旨展開、学術的価値のいずれにおいても優秀卒業論文にふさわしい力作といえる。